

世代を紡ぐ 道しるるべ

④

中島敏

～元海上保安官のひょうびつ

私は青年海外協力隊員として、バン格拉デシユ第2の都市、チッタゴンにある畜水産省漁業開発公社所属の水産大学校に派遣されました。この大学校は漁船の近代化に伴う人材育成等のため設立したもので、私は教官として航海科を受け持ちました。当初の派遣要請には「実習船を使用しての

実践的な教育訓練の教官」と記載、実習船を用いての訓練ならば、言葉が多少通じなくとも何とかなるだろうと安易な気持ちでおりました(当初の志とは異なりますが……)。

ところが現地入りし、確認したところ、実践的訓練の二丁目一番地である実習船がありません。校長室に

飛び込み「派遣要請の内容と違う。どうしたらいいのしょうか?」と尋ねたところ「問題ない。あなたならできる」との答え。頭が真っ白になりました(ちなみに「問題ない」は現地の常套句。この言葉には大いに悩まされま

した。愕然として つも、何か やらねばと開き直り、参考までにとまたま持参していた航海学の書籍 "Dutton's Nautical Navigation" をフル活用。当時、ワープロもパソコンもない中、身銭を切って購入したブラザーのタイプライターでひたすらレ

ジュメを作成、机上での授業をなんとか軌道に乗せることができました。情勢の変化に "adjusts the sails" (第3話参照) です。ちなみにこの書籍、航海学のバイブルといわれており、学生時代、航海科の教官だった。

っているか、不安な気持ちのまま帰国せざるを得なかったのが心残りでした。海上保安庁に復帰後、私は第五管区海上保安本部(神戸)での勤務となりました。ある日、横浜港でバン格拉デシユの貨物船で大麻が発見され、被疑者が

偶然の再会

ベンガル語しか解せないとのこと。当時まだベンガル語が頭の片隅に残っていたことから、この捜査の通訳官として横浜に派遣されました。

偶然とは怖いものです。捜査中、この船に赴くべく、岸壁を歩いていたところ、被疑者が乗り込む貨物船か

た故嶋田和治氏のご推薦です。これが手元になれば、悲惨な結果となっていました。感謝です。ただ、付け焼刃的な授業なので、やるべきことができていたのか、教え子が実践でも通用する航海士とな

ら私に向かつて「Sir, sir (先生、先生)」と呼びかける人物がいました。見上げると、なんと私の教え子です。この船に見習い士官として乗り組んでいるとのこと。偶然の再会に驚くとともに、手探りでこの拙い授業であったにもかかわらず、立派に成長している教え子を前に、ベンガル人の優秀さに感激、微力ながら人材育成の一翼を担えたと安堵の気持ちが広がりました。

余談ながら、この教え子、大麻事件には一切関わっていません。念のため。
(第44代海上保安庁長官 11つづく